

思ひ遣る すべての知らねば

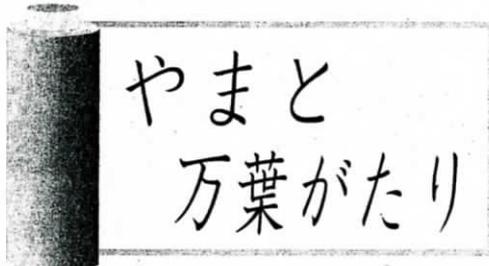
片堦の 底にぞわれは

恋ひなりにける

粟田女娘子(巻四・七〇七)

『万葉集』の題詞に
よると、この歌は粟田
女娘子が大伴家持に贈
ったとされます。歌の
末尾に「土堦の中に注
す」という細字注が付
けられており、作者の
粟田女娘子が土製の堦
(碗)の中に歌を書き
記して家持に贈ったこ
とがわかります。
その堦は「片堦」とい
う片側に注ぎ口のある

土器で、「片堦の底」と
「片思いの底」が掛詞
となっていて、片思
いの底に沈む心情を、
同じ呼び名を持つ土器
の底に書き記す趣向を
凝らした歌です。土器
が手元にある場所です
かれていますことから、
宴席での戯れの歌も
しれません。粟田女娘
子は伝未詳の女性です
がこのような機知に



富んだ歌を家持に2首
贈っています。近年、土
器に歌を記した古代の
実例が各地から発掘調
査で出土しています。
平安宮・京跡では、歌な
いしは歌の一部とみら
れる語句を墨で記した
土器が数カ所出土して
います。山梨県の遺
跡では、焼成する前に
ヘラのような器具で歌
を刻みつけて焼き上げ

た土器も見つかってい
ます。『伊勢物語』や
『蜻蛉日記』など平安時
代の文学作品に歌を土
器に記して贈答する記
述があることから、こ
うした習慣は平安時代
には広く行われていた
ことがわかります。

『万葉集』に収録さ
れたこの歌の事例は、
歌が記された土器を実
際に受け取った家持
が、内容や趣向が印象
深かったため注を付し
て記録したもので、奈
良時代以前にも同様の
行為はしばしば行われ

たと考えられます。奈
良時代以前の遺跡で歌
を記した土器の確実な
出土事例は未確認です
が、「歌一首」「伊毛」
「乃古」などと墨書し
た土器が聖武天皇の紫
香染宮跡(滋賀県)で
見つかっています。「伊
毛」「乃古」は万葉仮名
による表記とみられ、
あるいは歌句の一部な
のかも知れません。
(県立万葉文化館主任
研究員・竹内亮)

次回(12月2日)

【訳】思いを晴らし遣る方法がわからないので、
片堦(片思い)の底に沈んで私は恋するようにな
ってしまいました。